八丈綺談　二

へ 13
976
2

美濃舊衣八丈綺談巻之二

東都 曲亭馬琴 編演

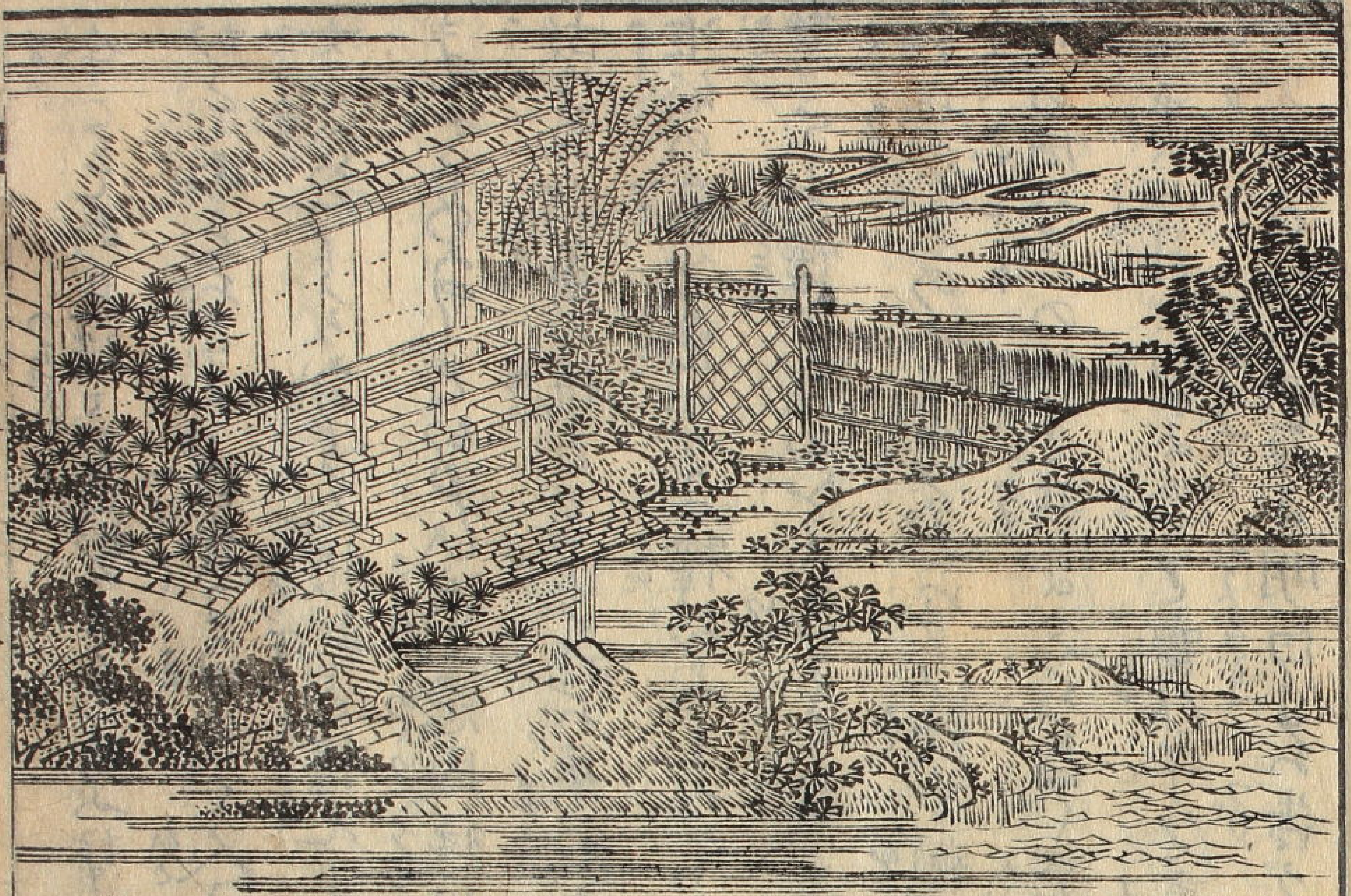
乾為天 不破の関

不破の関ハ美濃國不破の郡にありしかバ、世にこれぞ関の名によびなせる。この関ハ天武天皇の白鳳二年に立てられたり。東山道の扞城なりしかども、後にいたりて荒るるや、歌にハさらに照月の板庇を漏るよし詠り。頽廃既に年ありて今その蹟ハ定かならねど、関が原、大関村、関の藤川、小川など、関に名付けて存るよしあり。呼ぶ里ハみな彼関の餘波なり。さればこそ尾花才作が居所とて、ふとくらる関の小川の東すこし、関が原へ遠からじとぞ。又芦月一角が奴隷諸平が舊里ハ関の小川の西にして、白木と唱る痩村なり。却説諸平ハいはゆる比合渡林の芝生にて諜ぬを撃殺し、彼が守より賜る金を輙く奪ひとりて、その金と合せしかバ。

二十五金の本蔵を獲たり。人にはしらせじとおもへば間道より。七里が程を直と
走りて。白木村へゆきつ。里の戸毎に折めぐりて。別後の恙なきを祝し
祝されし。此度はおのれども主におくれて。俄頃に故郷へかへりしぞ。守より金を
賜りし縁由さへ告もしつ。ある人もかれらが宿所へ排ひて膝を容る所。
曩に二親もまかりて。果敢なしく親族へあづけしど。田舎人の憑くて。訊ひたゞつて
なかりしかば諸平は人なきうちに。田園をもてすさぬに。生活の便も見ず何を
欲得とおもひなりしかど。その処は美濃の尾山へ移りて。木を伐出すに便宜
あれば。件の金をもて。一座の檜山を購つ。喚声といふ妻を娶りて。ともに
くらしく世を渡るに。女房喚声は帰るぞ。その月より有身て。次の年の
五月五日。良人に昼餉を饋るとて。因果塚のもとを過るにまだ十月に
満ざるにその時猛に産の気つきて。宿所へは得もかへらで。件の塚を産室にす。

女子をうまにけり。縡をしる比良人諸平は。折もよしとて来て。且驚き且
歓びて。抱きとりて。齊しく山挊する樵夫ら集合しつ相譚して。
女房を擁に舁し。児を懐にして。宿所へかへるに。八月子なれども健にて。その面影は
親に肖ず。目皃すぐれ愛らしく。清らかなるに。いかなる故にや。右の拳を
緊と握りて。ひらかず。しかれども絶く披ぞしるかるべきものとなすすべなく。女房
喚声はとまかくに。臨産の疲労肥ださず。病て百日ばかりありしく。終に逝く
なりけり。されば古より。五月五日に生るゝ子は。必家に祟るといへり。儻人と
縡あるのみ。天文の比までは。この邦にも又とある事あり。殊に白木の一村もぞ
いへれば。縡を甚しく富る家はその子をもて。假に他人に養せ。或は異姓を
冒せるもの。貧きものはなどによその子を棄るもありき又多かり。諸平は女児が誕
生日の世に忌端午の節なれば。彼もや母にや祟らんと思ふに。いとど怪しきは

生れしより日ごろ拵へしれど右れ巻を披くとはしそこへせん術もなく抱へて母のなき嬰児をいかにして育むべしと不便なることなれど又後さへと過がたきに。餓て死るを俟んより棄ばやとおもひ決て。一夕嬰児を懐に抱きつゝ。彼此を徘徊するに村落の冨家聞かくとしに等しかれのうちへ棄る子あるを門に擇むも。流石に親の情かく是首もせまし。彼首にやと迷ふてろ紙とゞめかねぬ。大関村に数へあれど宿にまで棄子て



途に関の小門ある堺橋紙うちつけてあり。みて子とあらく揺揚つ敷なけるを野干玉の夜の門波いと寂しき浮世に秋のさら風に招くとともに尾花の雲尾花が門にまつわり。当下諸平へつくと。才作が擔を瞻仰て。忽地にとつかわ。この処に豫て聞しが故主の同僚にし尾花氏の新宅なり。彼人は禄の中のおんなれども愛ろしいける故や退糧あらく。閑居の人となりあへど。第一の出頭なる。牧村知の媒なれど。

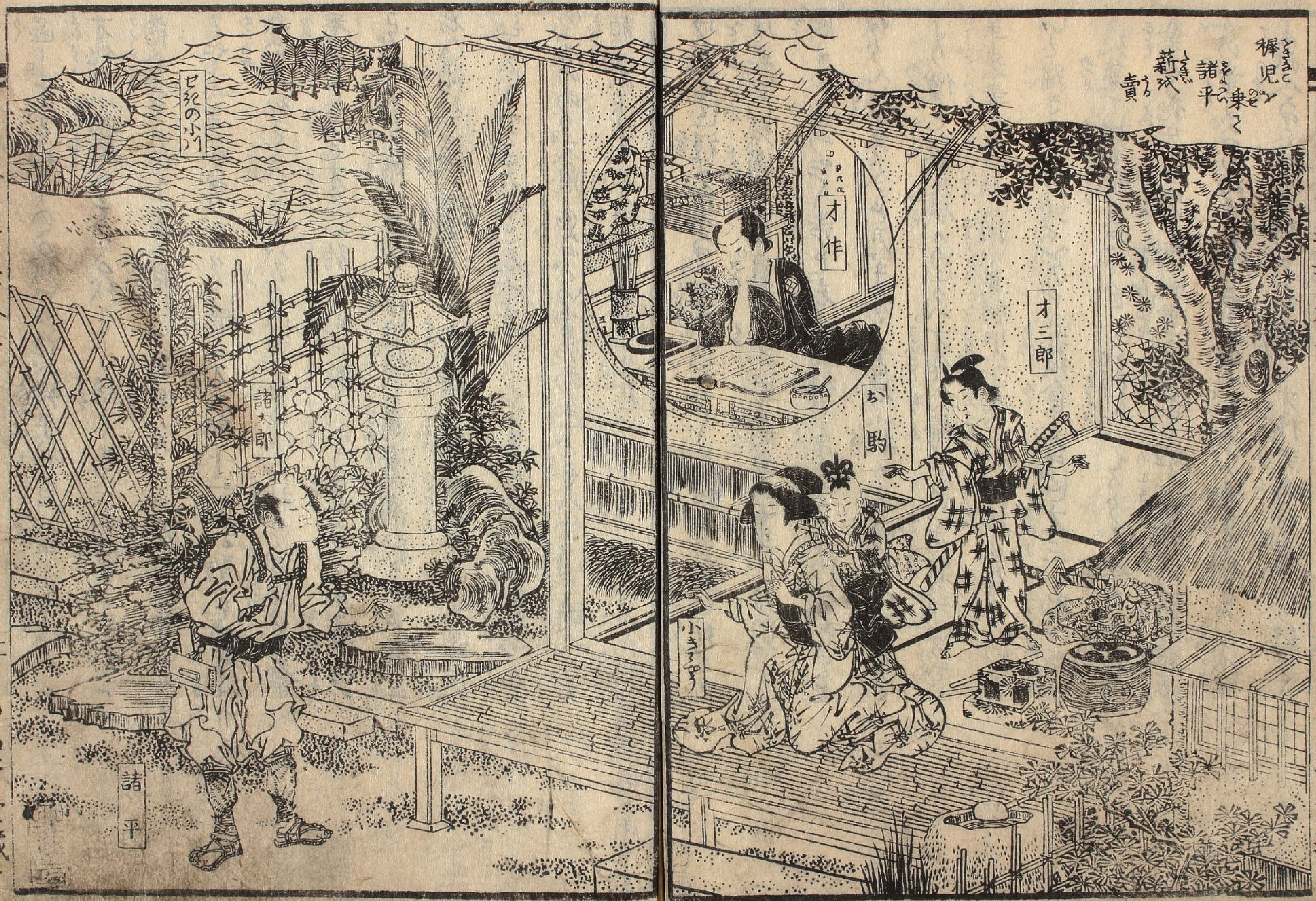
今こそあれ後にハ召かへされもせらるべし。それまでくにまかりぬ。生涯
かくてあれども。衣食にも缺く人にハあらねど。男児ひとりありしが早世けり。
女子ハまだいとけなけれバ。彼此と擇んより。女児がために庇蔭を憑む。この人に
ますものなしとおもひ決し。悪因縁。母が乳をもらひて。護育ちのがこれなりと
故主なる一角が仇とおもはねバ。果敢なきわざと打忘れて。背負ありしに
準備の畚を密すに。釋おろしつゝ音もなや疲労れんよく睡めたる妾児を。
驚さじと懐より。出しつゝ畚に盛り。擔の枡に掛て見る。こゝろ子なるべらの
鈎垣夜ものぶに悲ぞなり泣ぐ。親ハ泪の打水に。濡らしを袂のうら客みれ。
暁の風八声の鶏と共にゝおどろきて妾児をとひ捨てぞかへりける。かくて
諸平ハ四月が程に妻を喪ひ子を棄て憂をやるせなきものから。
女児ぐる故人向毎に明白もなく告ぐて彼ハ物怪の幸に養んといふ

ものあへぐ。近江の人造しつゝとかひろめてとも人ハしれど。里の流俗なれバ
これ然外ぞ。又姉妹きるものあり。諸平ハその明年因といふ後妻を娶りて
より。三年といふ春の比。男児を産せ給ひけれバ。これを諸太郎と名づけたり。
しかるにその年の雷鳴月に。山洪水いでゝ出て。白木の一郷大かたハ屋の腰を
洗はれども。命危くさとらるゝに。諸平が宿所ハ山に倚て。殊に低さ
処なれバ。いかでかハ脱るべき。予て逆さなるに抱こさ。夫婦ハ孫子に逃登りつ。
辛くして恙なけれど。家ハ蹟なく流されし。物とてもなく残るべうもあらず。
稲葉山よりくだし比。二十五金の本銭あり。此彼に用ひよけれど。なほ十二金
餘の貯禄あり。しかれどもこれさへにかし流されし。木偏に猴の枝を失ひ。澤渡る鮮の
穴を毀ちてるこゝちして。進退ここに究りぬ。輪廻應報のおそろしく。かゝあるべき
とるがらに足るとしらぬ心より。曩に楳麿を撃殺して。奪ひとりたる金の数

そがまゝ此度失ひし。執着のあまりところ欲にこゝ平なるにあらざりけり。と
むづかしくいふらくにむし　悔しくおもへども今さらにまさべきものならば。是
よりむしろかゝく。木を伐草を刈ても。口に念仏は唱せども貪ることは
休ずとあらじとぞろくしてありし処に。形たぐりなる白屋を締りけて僅に
月日を送る程に。次の年の夏の比。女房因は馬に柴を負させるとて。膝頭を
蹴折られ。剰肩骨を蹂躙れて。是より生涯半身遂ず。此彼の療用に。ほと
生活の便着を失ひ。衣食の絅と憑る。檜山を人に售らく。処と共にいと
細き本読をこくつぐくとあらは拾べ。人のために枝を折或は一駄の薪を脊
負ひて。関の小川を西東へ。今須の驛野上の里。垂井藍川乃あとりまぐ。
日毎にこゝと売賣あらくに。留るとる妻は廃人なり。起居も夫の羽翼に
よる。石價にありしものに。稚児をうちまもりせんべいとゞ便るものあらねば。

薪の上に刺衣を布て。今茲ふたつになる。諸太郎を抱りのせて。生活に
出しかば。その故を問そのものあなく。人をうこと此紙悴く。薪を買ものいと
多かりき。諸平ハよりにおぶかぎと稚児が本読になりつゝ。辛き世わたる塩竈乃
浦ならなくに朝夕の煙の價を獲たりけり。是より先尾花才作ハそひもかけざ
りし門へ娶児を捨られく。うちとおりしとぞその暁に。とりへとくみさば
女子なりしを。まだ三日今月百日あまりになりやせん乳額のいと愛
らしく。膚ハ玉を延ぞるにも似たる。かゝる児をいつくしと棄られあり
痛ましと正首に夫婦ゆるに居膝に置らく慈むぞことかなり。養育せずやと
そよまでなれも一子才三郎ハやう四才になりしが。小枯枝が乳乃まだ
涸ねず。養ふよりやすかり。あわこの子がらこふ棄られたるを脱るも因縁なる
べしとて。詰朝彳の新紙里正に告ず。明白に養ひとりつ。是が棄られし

さるに元より浮たる夜衣の褄に牧駒と染たる紙片、いとゞ奇しく思ひしかバ、その名を
おこくお駒と呼びて、定らぬ名なれども小桔梗が乳をのみてぞ成長む程に。
思ひの外によく肥て、らうたげに愛らしく、なりぬれバ、いかなる故ある者なりと。
極まる随に抱くとてはじめて気にとりて棄らもせけん。と人ハ不便がりけり。
ありとあるべき医療を竭し、或ハ神仏へ立願して祈れどもその験もなくて、五年
あまりの歳を経る程に。掌中玉と人ぞかなしみね。容止ますます愛敬づきて、心ざま
怜悧なれバ、恩愛実の子にまさりて、才化夫婦ハ掌中の珠と慈愛き。
とにかくにお駒が右手の指くさりて、かへらんは、生育後才三郎が
婦にとぞ言ふ、ふたりを倶に誘ひ、似つかはしき夫婦ならんと、その事のみを
希ふ親の心ハ是なかれども、才三郎ハ幼きより、お駒とおのづから友垣と結ぶ
縁にやありけん、送る朝夕あそばせてや、お駒も亦才三郎と、いと睦しく遊び
けり。かくて程に白木なる諸平ハ、ありし薪を脊負ひ、諸太郎さへ召かれ来て。
尾花が門を過るにぞ、襄に棄たる前妻の女児がなへ、ねがはしく今の女房
因よそなく告もしらせ難ど。年来よるりしかバ、さそそみ大きくなり
ぬらん外なるぞ、と見まはりしと思ふに、わらひ喚び入れて。下さび薪を送
より價を殊に廉くりしかバ、才化夫婦ハこの宗賣なし、いで、お駒が親とてある
年来妻の難病に困じ果、穉児を携へて、生活に来るものぞと、人もいひ彼もいへバ。
いと痛ましく思ひつゝ、ありし薪を食しめなど、才三お駒が玩物の、ふりさる紙
を集て諸太郎にとらせなどかバ、諸平ハ又さとて今てハ花主と得るのよろこび
棄て花女が女児が面ハ雪の中なる姫小松、霜の朝の瞿粟に、ますて愛らし
女の童にぞなりぬる。と思ふにつけても、その事とても、かくハ云ず、只紙開くよしなに、右の
手に人ることならぬをうち歎く。才化夫婦ハ愍めり、いよく言ず素生を


穉児の棄て
諸平
薪を
貴る
才作
才三郎
お駒
小きてう
せみの小川
諸太郎
諸平

匿し。されどもすゞしのみなるゆゑにいるなべ。緒手は芦月一角に由縁あるものなりとぞ。
才作も小枯枝も。そのみなもとを絶しくぞはやくにつきてみるにはけり。世には
薄命なるものゝごとく。憐むところ深かりけり。かくて春すぎ年くれて天文も
はや十一年になりにけり。時に才三郎十二歳。お駒はその年十なれば。此彼共に
愛敬づきて月ならば五日の影。花ならば梢の含後の色香も。ちと量られ人を
誉親を悩す。才三とお駒は一對の雛人形に異ならず。擇抜の藪ぞとて君は
これ使よ。これ娘よとて。推論ねど高安の面影うつる筒井筒のゆかり縁しと
もひ沼む。二親は豫てより。玉の鑵に金の綆只そのまゝに結びをくに。末を
むとんるによわさるやと。もつにつけてまうせぬものは。お駒が右の拳を世に支指と
いふものあり。又亀手などいふものあれども。それは生得し畸人なり。お駒が拳は左る
類にあらねど。人のこなたに生れつき。握りてゐるものの披ざることもあらざと

才作は医師に向奇薬の業を。年来心がけ弾しける。その験なきにしもあらねど。なれ
ならひ捨がたくて。有一日小枯枝に對ひていふやう。大約児の生れてよりその手の
ひらかざるものは。数百年を歴る。墳の壌をとりて洗ふときは立地に效
ありと。唐山の書藉にも記し。これ國俗といふところの紙恋してゐることぞ踐もる。
さる覚つくの記不為ならず。既にこの奇病あれば。その方にもとといひぐさ。
幸なるかな當國には。美濃の尾山の古墳あり。道の程とほからねば。羽生へ
つかはして彼処に赴き。彼塚の壌を取りて。その效験を試みん。割符の准依
ありへどもへ小枯枝沈吟じ。それさるよしを語るべからねど。因果塚といふなり。
塚の鬼の祟ありとて。詣る人もなかりし紙縁くよりむかし結りぞさればや
彼墳の祈子なりとはゆるさる。芦月氏は家も絶えり。又そのむかし角六の
執しまうせしをありて。墳は祟あり。寺は建んと守のおん沙汰ありしところ。

これが父にて紙漉まゐらせ。その子の止女と稱へ比丘尼の乳母ぐさりにかゝることあり。
させる魔所にはあらねども。斧も入らぬ深山路に。悪獣もつまづき給ふぞと
人もいはざる古墳へ。近づく者はいとゞ危し。みづから深念きはめて。とりわけて今を
才作は呼とゞめ。笑ひ奇しく好む者は俗の常情。樵夫牧童等が首尾整ぬ
怪談に皆懼しく。ようやく紙を宣ふる。されど才作は武士の女児武士の妻にて
ありけるぞや。件の尾山は樹木ふかくも。里を去ること遠からねば。或はみの中山と唱へて
雉壠の山に鄰く。ね山児は一日も下上せざることなし。晴るる日ごとに眼
前に見ゆるものを。ふとおそろしくと云はれんとかたりければ。さて再び
漉すがら。甲夜より割籠を調へ。才作は詰且八声の鶏と共に起出て
身かろく打扮。腰に両口の刀を挿して一挺の鍬引下げ。笠ふかく戴きつゝ。
堀播より北をさす。野路数里を過ぎて。昂些し傾く比。尾上尾山の梺

登る時は今十月の初旬ながら。この山の時雨霄ごとに。苔滑に露路深て。動
ともすれば杖をとられし。面紙を吹く山風は袖にも冷きけれども。背は汗ぞ流れし。
仰上れば青壁刀もて削るがごとく。直下せば黄葉楼をなす。徐に似たり。登ること
数町にして。墳のほとりに来てけるに。一坏の土饅頭。累々として。抗鬼荒
草の裡にかくれ。蕭々たる白楊いくたびか枯れて。術なき青塚を穢さる。
時に寒煙前溪を埋め。山氣丘壠を掩ふ。悲むべき生と死と。貴賤百歳の人なく。
北邙千秋の墓あり。この墳はいかにか。柏芒寺の蹟ある。べくもの墳
なればいぶかしく。後の奸淫を懲らすべき。因果の道理眼前にとゞめたる。埋
れたりと淺まし。ひとりごちつゝ古墳の前に立ち後に遶る。引眺
杖にかく思ひ嗟嘆する。かくておくべきにあらざりきと。墳に
登りて念じつゝ鍬をとり直し。再び三たび掘起こし壊ちとも。小墳動かず墳は

山鳴り風暴まして。砂を飛し樹を倒し。電凄じき光景に。才佐は且怪み且駭
きさくやうやくと。命ある獣を鼻哩と捐衝る膝を立かねしく走りけんと
する程に。卻然として石砕け。塌然として墳崩れ。身を忽然と陥されて土
中に入ること一丈あまり。隧ある穴に。落て黒白は別ねども幸にして恙なし。
とく起あがりと。四搔どもとり著べき木の根もなく。足を掛べき礒もなし人跡絶たる
深山路に。人を喚とも孰か来べき。只この儘にあらんには。便乃断離し罐に
飢るべし。弥勒の出世にあふまでも。人揚をまたず出べし。今いかにせんとぞ人らぬ。
千々に心を苦めど。後悔さきにたゝずとかう。命運の竭る所。是非もなき
しか彼のまゝ又せんすべをなかりけり。浩処に空穴の中に。洞ころしく膚を侵し。
嘶てもろく物の声あり。才佐まなく心騒ぎ刀の鞆を振りまちくぐつくと
透しみるに。いと暗かりし穴の中。忽地霧の晴るが如く。まんまは左手の土

蜘蛛あり。右手の方は青草蛇あり。その状凡常ならず。毒蛇は眼角ありて鱗の
光見て。月を載する波のごとく。蜘蛛はその肚凹く。綵糸を網は白しく墨を吐く
烏賊に似たり。此彼右より左より。眼を瞪し舌を吐きて。才佐に飛蒐るを
巻とめ手に黄緑乱れ吹る網を繰かけて。刺殺さんとしたりしが。刃を抜くに
遑あらず。才佐は右手をのばし。蛇の腮を捷と捉。左手にまつはる蜘蛛の真中に膝ふ
締て動せず。さらばとて声を揚。嘯き叫ぶかとそあれ。諸平はこの日人に催され
木を伐んとて只ひとり。尾山の奥へ斧を入るゝに。山の神の暴るとおもひく。
何処ともなく震動して。杪を拂ふ風さへに。いとおそろしき光景なれば。安て
斧おさめつ。おのれ山を下らんとして。塚のかたより小あくつんとせし。怪しき
べし数百年。白骨黄土に埋れて。跡の途も古墳へ。歳るごとく陥せて。龍
蛇の穴に異ならず。只何となく毛骨竦て。おそるゝさし覗けば。穴の中に人落て

因果塚に諸平才作をまねく
才作

這個の繍像との巻には
あらくいまぜし字も
解分ることは編末に
至て當に氷解すべし
諸平

物と挑めしそふにや。嚙さ叫ぶ声高しどいへども、いとゞ遠くおかしみ。
ときなかりさ鳴さ覗けども。底ふかくして黒白をわかず。縁由こそ定かならね。
人ありて窟へ陥ちたるよ疑ひなし。救ひ出して縁故を問ばやとおもひしかば。
上より高く呼びかけて。人あらば繩を下せ。要に着て在る釣索を。
坎の中へ手操おろしつ。さくの窟にある者は呼べ。才佐は左右の
手よ毒蛇と蜘蛛を拄つ。十の指よいと纏まりけれども、援る人のありと喜びて、
索に縋りつかんとせしが。諸平は頻りに焦燥て、嗟夫のありと呟きつ。
ゆるく引く釣索を緩とよく。才佐が帯の結目へ引かけつ。さればこそとて
力を極めて倒立てる樹に巻つけて。衝と引く程に。才佐は身に傷つかず。毒
蛇と蜘蛛と左右の腕に纏ひつき。抱きとめて儘窟をいでしと忽地に
気絶しぬ。諸平は慌忙く。呼び活んとせしその人を見れば、

みける乞。おのが花主の尾花氏こそ、いかにと再び蘇生し石傷を撫で、顔に
吹かけなどしつゝ勧むるにぞ。才佐は漸くにして、ほつと太息する
息をつき、救ひし人をよく見るに、豫て相識る柴売の翁なれば、その歓び一方なら
ず。まづ感涙を拭ひつゝ、抑和主はいかにしてかく窟へ墮たる者なるぞと問へば
助けられし翁は、再生の恩恵にこそといふに、諸平は貌を改め、故とりあへずいひけるは、
此人は催促とかく山の木伐る為に、伐頃に風暴し地震て、須臾に墳ざさ
とよぶ。わが〳〵出るよしも無くて、けふまで花主を救ひまゐらせてこそ
わが身は赤坂の翁にて、この窟へ墮たりしこと、いかに尾花へ
今さらに陣の親匿がごとく。お駒がために古墳の壌を取りにまゐりしが、此墳の
崩れし故、毒蛇土蜘蛛のすさみに首尾を扼へられしかば。諸平は頻に驚嘆し、
原来この人は、お駒が養母の亀にて。医療を尽せど弾し候ぞ。深山へ分け入りぬ。

ある墳と。よりつもこれも紙犯して。身を殺さんとしつる人。されば女児のために
またれば又とうどこれも紙助く。実に不思議の因縁なりとこゝろに思ひ
口をへぬらしぞ。数回才作が。恙なきを祝しつゝさてもその毒虫とつゞけて
脱もやく。物さへ被なく出ずと。眉うち顰て問ひぞ。才作と良く似つらく。
猛に左右狭見えるに。蜘蛛と毒蛇へあらずして。周一尺四五寸ありといふあり
よる硯あり。又数貫文の古銭あり。硯へその形円くして。中に些一銅り含るも。
銭へみなりて銭よく。緑青に文字を埋め。緡へまだく朽果しまど。謹固りく
教まるぞし。才作へとも紙こそく。小膝拍て驚嘆し。硯へもり行平の嬖妾に
ありし稲葉山よりて世に名のある。柏芒寺の什物なるべし。伴人も。柏芒寺の
午句坊。不破の孀婦。谷折とかいふ人に姦通し。その子木二郎紙殺せしが。斧も
ゆるく自害せり。破戒らぬ悪僧も。その哀に沼ぬぎしく。母子の死骸を跑に
沈めけるは不愛惜かやと。悟りけん稲葉山の硯を取て。池水に投入れつ。銭八
貫百文ありしを。悉皆に置き。おなじ水底へ沈めしかば。麓の里人崇敬おもひ。
池を埋め。塚を築。因果の名さへ負せてけり。今に至て数百年。古蹟をとゞめ
遂せしに。一朝すでに墳崩れ。硯と銭と人間にゆてふたゝび出るも。天数なるべければ。
悪気消散しけん。今より障礙あるべからず。さればこそ又硯と銭と久しく土中に
埋れて。その精。蜘蛛の形と見え。毒蛇の形に見えたるのみにあらずして見ゆ
合せたるに。その硯は円くして。その腹殊に脹大なれば。蜘蛛の形に見えたるに
又その銭の錆着て。長やかに連りたれば。青草蛇に見えぬらん。かゝればみを
因あり果あり。怪むに似て怪むに足らず。いぞや硯銭洗ふて見んといふに
諸平へやうやく暁りて。いよく奇異のおもひをなし。猶て石礫を揀わけて件の
硯銭洗ふてみれば。果して背に文字顕れたり。さるもいなる葉の山の峯に舟つる

まつさへ硯のみ今ぞありけん。行平と稱つけゝる。鮮中に讀もつゞ原来擬ひ
かたちあんまく。才佐これが袖に載て。愛玩せるを大かたならず思ひ。諸平に
硯に意ありとしらぎ。件の猿を打剥しうち剥して数をへゞその数八貫五百文なりし。
才佐ハ又これを見て和主折よくこゝに来ずハこの猿救ふにおよバざりせバこの
骨へこの盗に拵て因果の名残まぬべし。再生の恩あまりあれバこそ當座
ゆへ酬がひことにハ硯を愛せるのミ。この猿ハ悉。和主とあらく朝々の煙の價に
なさへといひそれにく諸平ハ忽地に。溢るゝ笑みありつ笑方向ひつゝ為に太く悦ぬ。
先主まくぞありつるハ。かまどりのわかきてもとめ。いつく酬ひ求むべき
この猿も辛しく。被れ場ありしに。悉く其に。かりせバとそでや受入せぬ。そ半紙
ぞりなりといへバ才佐び紙掉。これハ閑居の身なれども。衣食ゆへ物を欽ぐ。
和主ハ妻の長く病著。稗児さへよあるなれバ。艱苦をさこそとおもふなる。

謙退辞讓ハ人によるべし。但この墳の崩しハ。これ墮るとさこそ。人の知らぬ奇談
傳へて。浮説怪談喋々しく。これが名さへかりまくせるべし。これらが叢臣
とうかゞ須べ人に告ることあらバありなんとなるとありぬべし人と信るによく。説諭せバ
うち見ば宜ふ所その理ありいひよけにまそのお紙孰よりのなりす
べし。たゞかゝる命に在つゝひそこれをあやしんと意て。上なる単の刺衣を
脱て。件の猿をわし裹て。約索うけて肩に載れバ。才佐ハ稲葉山の硯を塚の
塊を袱に包て背に負ける丘に麓へおりつゝてより左右に立つゝまれ。才
佐ハ関の小川へ。諸平ハ白木へかへりぬ。さる程に因果塚稲に崩ての跡穴に
なりぬとぞ。麓より里に傳へて。彼此に風声し。これを見んとて山に登る
人のおくといふをきかむ。只管の数多ありなかむ物の其の夜なれなければ。
鄙語よいふ七十五日。件の噂へそや止て。見てにつくぬへりなりぬることなど。

尾山の軸へ昔より。近郷の荼毘所なりしが。牛句坊が塚となりて。その名のみ
まさしるくなりぬ。

児為潭　不破の関乃下

尾花才佐ハ。その夜さり。墓なる宿所へ帰りて。小桔梗才三郎ホに因果
塚の山崩れたる事の一條を残らず話し聞かせて。最前硯を獲たり
とて袱包をとき被き。出して見せしが。妻もその子もいと怪しみ
物がたりに耳を側てゝ母に驚嘆しつ。墓なるを歎びつ。小桔梗ハ
つくづと硯を見て良人に対ひ。風流乃こゝろなけれバ。かゝる古物に
愛めでゝとゝろしとてもまうとふあらぬ事なれど。むかし起ありし悪僧が。令般
の土にまじりしを惜しみ。賊を獲て人にとらせて。その硯はみだりにとりて
家の宝としあがめつゝ。宗なるを得らん。墳の壊さるゝまで
土中にかくれ埋もりし硯は。茶毘所なるなかなれバ。よし事を穢しとせば旧の如
塚へ投入れおかんにまさるべからん。さるも忌べき者なれバ。と正首に
禁めしかバ。才佐は冷笑ひ。賤しの婦人のこゝろには。さもありなんも理なれど。
既に数百の年を歴て。自然と山崩れ塚より出し硯は天の錫なるべし
夢にもあれ何の祟りかあるべき。陰鬼を祟ひて。悪灵消散せんのみ。
今更何の祟あるべきことはあらん。身が来ることかなはざると非む辞もあらざるに。
日来に似げなく只ひとつの硯を惜む良人のこゝろを嫉く推く小膝をすゝめ。
かくまでに愛めでさせ給ふを。又まうさんハ恐れなれども。むかし守中をこの沙汰あり。
墳を発きてその硯を。ぬしや仰しつるに。又諫めてまうさくその
沙汰止ぬと稱へとさ。ゆめつるその後こゝろあらく硯をそろまゝに安進せ
あひろバ才三郎が後にまづく。家の宝とはまさしくあらんに。守人も報せまで

秘めたる塚の鬼の祟りなりとも後護となすらぬぞやといひあはせしと果は頭をもち掉
おん身が異見は常言にいふ女人さかしくて牛をもうるといへど牛售損の類なり。
縦この硯のみ。むかしその沙汰ありとも。そはおん身が穉き時只うち
聞たるのみなるべし。いと覚束なきことぞ。さるにより今故もなうして家を
守へ進らせんは。孰か損ならざらん。先人の妬忌の嫌さるに俸禄を辞して
仕を致し。弓箭を捨て十餘年。かくせずして世をのがるゝのみ。又改めて栄利を
禄へんとするは子のために何を求ん。足ることを知れば貧しといふとも心は富む。
又官途の毎に心をくるしめ。されど仕へんともまくるべし。まして子ども等が
人となりて後。おのがまゝに。されば才三郎も示こゝろよく。数園あるべく撰
喩こゝもの物がいかなる自誇憍慢。この硯より後終に筆を。命も危くもあるべき果
ならぬ枉屈のかゝる物を。かくてはならぬ妻はそれなりといふがひるかへして。強てまた

諫めざりけり。かくてその夜は深く更にければ。そのまゝ親子が房に入りつゝ、暁旦
才佐は因果塚の壌をもて、お駒が右の拳を洗ふに。奇なるかな猶槃の中
より掘りいでたる虫ども。一夜の東風南枝に偏へ、梅まんご一花
咲るが如く。忽然と手を披けば。裏より両の虫生り。その形大きなるは
蟬に似て色青く。小さきは蒲の色して。形蝦子に似て。時ならず小桔枝に止まりて
鳴く。且歎び且怪しみ。彼此としばしは、才二郎へその虫を捕へんとするに
飛で大きなるは、お駒が方へ。小さきは才三郎が肩を飛越て遂に見えず、往方も
知らざりける。驅索んとするに立騒ぎ。才佐は急にも林の子どもよき
事とはせそ。お駒が指の節伸て。人並になりしかば。その常より勝る
虫とはあさり求て何ともせん。大病人の病ようやく。奇虫を生ずることあり。
癖石。白虫。労虫などいふは皆人の病ひなるは。お駒が常より出たる虫も

拙の節は仲披も病なりけん絶てあやしむところなかりし打捨て
おきしといふ。その識る徒は怪しを怪とせず気色なければ妻もその子も
感服して疑ひ解るものから。後にはおもひあへるもあれば。彼虫はさる類にあらず。
孫を還すと世にいふから実ある蜻蚨にして。牛勾坊が生を換しとも
又そのひとつなりしと。才佐はたゞもとよりそりさる裙の尾花夫婦は。
お駒が右手の開きしより。その歓びに得しと嬉しと彼が二八になりしころ才
三郎の妻とせんとて。さやそのる紙明と地の子どもらにひきあはせしより
しばらく小桔梗は日毎にお駒をてるさせ又縫刺のる紙教え糸竹の技
まで皆海をもをしへて去歳を暮し今年とあらたまれバお駒が容止八しあ
ましく沈魚落雁羞月閉花と唐人のいひしもでゆるほど少女と
なりぬされば十あまり三四より生とそつくまで送る情にて才三郎と。

青蚨畧圖説

青蚨形如蟬而長其子如蝦子著草葉上一説形如蚕青色有光生於池澤多集蒲葉上故名蒲蚕以母血塗八十一錢以子血塗八十一錢留子用母留母用子皆自還誠仙術也説見淮南子萬畢術干宝捜神記李珣異物志今据本草圖経以潤色之

もとる処に遊ぐ狢どもころの中には娯しくも侘びしと思ひつくせれ山の
峡なる糸操又来る春をまちつゝ親添ましく深くりその業下某生再説
白木の諸平はなんとかも尾山にて才作を校ひしも八貫あまりの
古銭を獲てよりこそ紙本銭として薪紙売るに日毎に五倍十倍の
利を得ること大かたならず。かくは薪は鈍りしもして山の立木を買ひとりて
こと紙売るにはまして利ありて。きくそのきる所。あてつどといふとて
僅に三年あまりが程に数百金の得つれて。やさしげ人によりしに漸く
田舎紙いぶせくもひて。活業の為よろしき地方を彼此とえらむにぞ。
関の小川の堰橋は東山道の咽喉にして。稲葉山へ遠からず。京鎌倉の便
路なるに。これを彼処は水運よくて。木を挽入るゝに便よくありとて。西の橋
づく接続して花尾いろめく蔦るける。五間四面の材木店紙問屋ぞ

ある里ならずとて。白朮の字の点を省きて。家号白木屋と唱へつ。
両三人の小廝を使ひて。国守の所要をうけおふ。京鎌倉はいふもさらなり。
浪華左海の浦までも。買売せずといふことなければ。人みな諸平が富
その速なるに驚嘆し。その高運を羨めり。されど諸平は心ざま吝嗇
なるものなれば。貪るのみにて散ことなく。早夕の服ぶるも。小廝ほが
腹には満せず。只責使へども使ひ足らず。みづから本紙ひき東紙推去
冬の寒き朝も。汗紙流しく日紙暮を紙ひと嗚呼とて笑ふ者多かり。
このそれまでも女房因は。半月竟に利をしく凡三百六十日うち過てのと
ありといへども。諸太郎はまや九才になる物から。その性殊に靴くして
果敢なきものとえらず。諸平は只管利の為に。小廝が紙責使へど。
手紙愛するのみ人にまして。教るといふとも紙る者なるぞ。これ渠が随意養ひき。

多病なるひとり子の後継無きを愁て。閑人もがなと思へども。その人を求ねず。
又一人の甥ありけるが。そはまた默止て。有一日諸平ハ黄金沢へゆきしかバ。さすが妻の
里なれば圓願寺の林原を通る程に。とある所を見れバ年十六七なる田舎児の長旅に窶れし
さまにて衣なども破れ垢づき日ぐらしなる菅笠に同行二人と写しゝたれども
伴侶ありとも見えず。只ひとり街道なる松の株に尻をかけて法然と泣てをり。
諸平ハその性慳貪なれど人を憐むのこゝろハあれバ因縁遁れがたくやありけん。
ちかづきてそのわけとり入立よりて。小丈に係を何処のものぞ何とてひとり
泣くやと問へば。伴侶に後れ途に迷ひて。ちからなくさまに泣ぬやあらん縁故を尋ねせ
よと。素く問れて因縁語ひつゝもハ元来伴侶もありて。ひとり旅するものならず。
年四五才の春の比別れし父ハ當国なる稲葉山にありと聞て豫て彼のを信ずれバ。
つんまくわかさなれど。その瑶なる手早より。いなかの山へ来て捨へバ父を

黄泉の客となりしが。そや十四年前に特に先ひて舊里へかへ
らせぞ。形ハ見めのかはりぬれども。近江をさる人ハ皆進退既に究りて泣より
外なきべもなき所。あてさき紙精しきへといひつけて又泣にけり。諸平ハ已に我
つくと彼のつとおふにやと。この小豎子が面魂騙なども在るものゆゑハあらぬぞとて
来く今又に身をおく処なしとよべ。われが宿所へ伴ひて。小厮となして使ふとも
人の目となる給銀なとてもなる及ばねバ後てまぐらしもしにて益あり。とハ
思ひなくに紀物を拾ひにけり。と胸にまづ。おく算盤の玉ならで弾くが
ごく因縁なべくと。年少しくかくまぐくに。孝心ある紀人の凋落ハ紙熟が
あらもとひとあざらん。且ハ関の小川まく。白木屋諸平が家をつく。楪素木と
買賣しく。人のそこに世話なるものゝ後が落命紙あらもむかまり。救ひ
とりてぬるせんぞこれ莫大の恩なれバいかにと及ばずど主のために骨を

情く生涯こゝに仕んや。価が又いかなるものぞ。汝が為に何と思はるゝ。と
問ひ寄りて涙をそゝぎ、かくまでに憑しき人をおもはず値偶せしは不幸の
幸ひ。物数ならぬ足もとなれども小厮となりてつかへなば、身を牛馬になすまでも
ちからを竭して仕ざらんや。抑僕は諜が一子にて、名を諜松と喚るゝもの。
父諜が代は当村に在ひさしき荘客なれども、卑損水損に家衰へ果て
もとより里の債を償ふ為に只ひとり、些の由縁を心あてにおそく美濃路へ
赴きて、今の国主の御内なる苦月どのゝ奴隷となりぬと風の便りにきゝし一度
きこえて後は音耗なしときこえて、人に知れるの母を見るまで、又ちく
聞えしぞ。年十二の比よりして、養父の安否を問はずや、と思はざる日もなく
なりしかども、戦世は彼此に関の鎖の固く、旅寝ることもところに仕せぞ。
母は三ッのとしに後れて、今の母は母の妹なるが為めに叔母なれども心

苦しきのみなればこそ、只一下もはやく父にあはんと思ひ決めて、旧里なる手は
村を遂電し、百里にあまる道もいとはず、戦場を過る日も流矢に膽を冷し、嶺を
踰る日は山賊に劫されて、百折千磨の艱苦をなめて、稲葉山へ来つくに
父は天文ちりぢりに耗れて、芦月の家断絶しぬ。比守より金を借りつゝ旧里ならず
あるとき合渡林のほとりをゆく程に、鏡に嚇されし。仇人は定かならねど親
其仲が面あるべしとて、そのもの忽地捕られしかば、今まで分明ならずしく
縛まへ獄舎に身まかり、その子は休ぬといへる聟なる彼此人の拘ぐるにあらねど
なかり撃ねし天に叫び地に叫べど、外によるべもなき紀矢乃、墓所を
合渡に赴き其処にその後をあらしつ、髪を剃り落ち、親の菩提を
吊はんと思ひて、合渡よりこの処までいつくその寺へ身を投て、薙髪を告し
家の子は只管憑む者とせど、保人なきを述許されざれば、せん術竭て身を推

方と定めかねたる折にかゝり。救せ給ハゞこなたなるに。産神にまさる利益なきにあらじと
思ひしと手紙あり。誓と書ける程ハ伏拝む誠さへありても腹ある輩諸平八が中に
ありく毎に針もて胸を刺すごとくなるに奴に撞見しぐようなりしと思ひ
つるをと悔しくなければ息災の日を見くる事をゑせず。又つくづくとおもふに果して
ある一旦の欲に惑ひて。蝶介が紙うち殺し。その金紙とりし其ども。山洪波に
推流されて。一枚も身には着ず今更なく渠が子どもの処に撞見
て。その困窮を救んといひしを遂ざりぬ因縁なるべし。金紙失ひ妻を喪ひ
女児を指て又今の。女房が難病も。故ありぬべくおもひより。朝夕念仏を
彼蝶介が為にとなへ。今又その子を救ひなば。罪障も消滅せんことに
まさし功徳ハあらじとおもひかへして嘆息し。いと哀なる物がたり。審に受けが
痛しさをもなぐさめまゐらすべく。痛し。とて又来にと先へたちて園の小川へ

いかゝる恩とうらみの棧橋下ゆく水に譬へる。人の往方ハ定めがたき。蝶松が
亡母ハ時頼藝の妾なりしが。ゆゑありて頼藝武威衰へ美濃の守護職を斎
藤道三に奪はれて。冨田に閑居したまふところ。蝶松が母ハ身の暇をたまはりて。
その妹斧もろとも。所縁につきて下総なる。手口村へ赴きつ。蝶介が妻となりて。
僅に二百餘日にして。蝶松を産しが。蝶介ハ母に嫁りて。原来この子を
時數の落備るなるべしと。おもふのこゝろに妻をゑらいはど忌隔る処ありて。
塵さへすゑず守む程に。三年といふ夏のはじめに。蝶松が母身まかりけれバ。
蝶介愛慕の哀にたへざれど。とさる処もあらねバ。よろづにはなれて
後くまでも迭に憑しかるべし。とて。廻妻の妹なる。斧後妻にせし其秋
より。田園に損おほくて。身上立べうもあらざれバ。蝶介ハ妻子を留めて。女
房が故郷なる。美濃國へ赴く程に。世ハさや道三に立ちありてなさてまゐるなる。

由縁の人も憑しからねば己と紙漉をして。其月一角が奴隷となりつゝもさて
次の年主の一角は尾花才作に撃れて。その家断絶し。鉄松は合渡にて諸平が
為に命を隕しつ。十余手紙得るまでも合戦諸國に止ともあるけれど舊里ありて
あるよしなれば紀さはれど鉄松は幼稚より。その心ざま卑からず孝心も又人に
ますりて。東西紙するところより。亡母の為に香花を絶さず。美濃にある父を
慕へども継母なる人は妬みに似ざる極めてる淫婦なれば。ゆるさぬ良人を悪しとも
思はず近郷の破落戸なる丈八といふ壮佼と密通し年なほ幼弱なる鉄松を
情なく罵使ひて。絶て骨肉の親みなければ鉄松はこれを紙うらみもせず
只その行状の人ならぬ紙うち歎くのみ色にも出さず。患苦の中に生育て
年もはや三五の上に生ゑれば父はいよく忌嫌ひて。外宅させるにも料紙鉄をも擲
まるを大くさきかしらばもし鉄松はその呵責に泣訴ざす乃尊命紙歎せなく

つくさずなかり。母のことは殊に憎くもあれど。丈八と情由あるよしはやく知りつく
人々や告るとおもひたまふ故なるべし。こよしあからさまにいはゞとこの手より
養育せられし。姨の浮名いかでか立べき。さればとて明に地に諌るとも
かひなき抗がたるかるとてその甲斐なし。今ハ夫や人となりぬ。一下び美
濃へ赴き。父の安否を問ざりしハ。大なる不孝と只顧におもひ決めて。
一封の遺書におのずから紙を出でぬ。手口を逐電せしなり。さればそのことを示
誠あらずといふことなく。緯とる親のためならば。皇天その孝を鑑み。神明
これを憐みてや。ほどなく仇人の家に身を投せしこそ不思議なれ。

美濃舊衣八丈綺談巻之二終